



種まき桜

佐佐木 邦子

仙台市青葉区下愛子に「種まき桜」として付近の人に親しまれている桜がある。種まき桜、つまりこの桜が咲いたら畑に種をまく。年によって寒暖の違いがあるから、農作業はカレンダー通りにやってもうまくいかない。桜の開花に合わせれば大丈夫なのだ。

種まき桜と呼ばれ農作業のモノサシになっている桜はこのほかにもたくさんある。畑ではなく田んぼの準備にかかる地域も多い。種をまく時期でその後の成長や収穫量が決まってくるのだから、この桜は大事だった。時代をさかのぼるほど重要性は大きく、親しまれ方も切実だったろう。そしてその少なくない部分の桜が、神社の境内にある。

桜の花が咲くと、人は何となく浮かれたいくなる。ふだんつまらなそうな顔をしている人でも用もないのにそわそわしてみたり、お酒を飲んで酔っぱらってみたり。東北の人はとくにそうだ。桜の花が咲けば文句なしに春。春といえば命のはじまりで、満開の桜は旺盛な生命力そのものだ。理屈ではない、桜の花とはそういうものだ。

昔は「花」といえば梅のことで、桜をさすようになったのは後代のことだそうだが、本当かなと思う。西の地方ではいざ知らず、すくなくとも東北ではずっと花イコール桜だったのではないか。梅も桜も開花期があまり変わらないから、早春の花として梅のありがたみは少ない。おまけに桜は山の神であり豊穰の神である木花之開耶姫の花である。サクラの「サ」は神稲を表す接頭語、「クラ」は神のいますところ。サクラという名前自体が神を示している。満開の桜は豊穰の予告だ。誰が見ても桜ではない辛夷（こぶし）を「田うち桜」と呼ぶ地方があるのもそのせいだろう。種まき桜や田打ち桜がカレンダーより信頼できるのはその開花が神の意味であるからだ。花といえば梅だったのは、中国

文化の受け入れに熱心だった宮廷貴族の話で、東北の庶民は真っ先に桜をイメージしただろうと思う。

わたしの叔父は四月半ばに死んだ。寺への道々いたるところに桜の花が咲き、菩提寺もまた桜が満開だった。新しい塔婆を立て、線香をあげている手元にも、桜の花びらがひっきりなしに落ちてきた。

種まき桜がお寺に多いのは、農耕民族の血が、命の始まりは死者が眠る場所から、と信じているせいもあるのではないか。植物が冬に枯れて死んでも、こぼれた種からおびたしい別な命が生まれる。あたりの黒い墓石の上に絶え間なく花びらが降っていた。生命力そのもののような桜の乱舞は、命の輪廻にも見えた。

霊園だより 2009.Vol.10